

海外の公園標識のセンスとユーモアについて

親泊 素子

江戸川大学国立公園研究所

はじめに

飛行機に乗ると、離陸して間もなく機内のスクリーンにシートベルトの締め方や酸素マスクの使い方、機内でのパソコンや携帯の利用についてのビデオが流れる。以前に乗ったアメリカの航空会社の機内動画が面白すぎた。普段は見飽きている安全解説のビデオもこの動画ばかりは、すっかり最後まで見入ってしまい、帰りの便が楽しみでたまらなかつたほどである。近頃、海外の航空会社はこういった安全のための説明に「おもしろさ」を付け加えることで乗客を画面に引き付けている。例えばその機内ビデオに音楽とダンスを取り入れたり、意外性を演出した子供だけの出演による安全性解説だったり、全く奇抜な格好をした人々が乗客としてコメディアンのような振る舞いでシートベルトの着用の仕方や機外への脱出方法などを演じている。もちろん、この本来の目的は乗客の安全対策のためのビデオではあるが、内容の面白さで乗客は最後まで見入ってしまい、その結果、自然にその安全性の注意が頭の中にインプットされる。

海外の公園を訪れると同様の体験をする。風景の美しさや公園施設の形や色の統一美もさることながら、標識文言のセンスとユーモアに圧倒される。奇抜な演出とユーモアを交えた海外の航空会社のように、思わず吹き出してしまうような絵と文言に自然に引き付けられてしまう。しかも、そのユーモアの中にしっかりと公園が伝えたいメッセージが見事に表現されているのである。また、海外の公園標識の文言はとてもわかりやすく、外国人にとっても理解しやすい英語で書かれている。堅苦しい表現ではなく、カジュアルな言葉を使用しているので、注意されるにしても親しみやすい感覚で受け止めることができ窮屈に感じない。もう一つよい表現だと感じる文言は公園の動植物資源の保護を訴える表現である。動物を一人称にした文言で訴えていたり、尊敬の念や協力を求めるソフトな語り口で、肯定的な表現を用いた文言は我が国が多言語表記を導入する際に学ぶべきものがあるかと思われる。

そこで本論はこのような英語の標識文言について、

主としてアメリカの国立公園や各地の動植物園でみつけた事例を紹介するとともに、公園標識の有効な表現方法について論ずるものである。この研究にあたっては、アメリカの国立公園の標識基準を作成しているハーバズフェリーセンターの専門家に2015年、2016年の2回、インタビューを行った。2015年のインタビューはワシントンDCのパークサービスとハーバズフェリーセンターをつなぐ電話インタビューで、2回目のインタビューはセンターで直接担当者からの聞き取りを行った。また、2018年には3月と5月の2回にわたって現地の公園調査を実施し事例収集に努めた。

I アメリカの公園標識の理念とタイプについて

アメリカの国立公園において公園のアイデンティティを確立するうえで最初に考えられたのがパークレンジャーのユニフォームであり、続いて公園のロゴが決められた。公園内の標識についての議論が出てきたのはその後であるが、1916年にアメリカ国立公園局が設立されると、早速、その当時の内務長官だったフランクリン・レーンは公園計画やデザインについて「景観と公園の構造物はその調和を考慮すべき」という原則を打ち立て、標識だけではなく、すべての国立公園の構造物デザインにその原則を適用することとしたのである。

この原則は「できるだけ目立たず、シンプルなデザイン」というものであり、1920年にデンバーで開催された公園所長会議で初めて取り決められた標識の統一使用である⁽¹⁾。その後、1940年、1972年、1988年、1990年代にマニュアルの改正が行われたが、2003年9月に公園局が委託をしたニューヨークのミーカー&アソシエイツ(Meeker & Associates)によって国立公園局のthe UniGuide Sign Standardsが新たに作成され、現在ではこれがアメリカ国立公園局の標準マニュアルとなっている。このUniGuideは900頁を超える厚さのマニュアルであり、標識に関するあらゆる情報が記載されているが、この大きな作り直しには理由があるという。それはアメリカにおいて、長い間、標識

が利用者と公園をつなぐ大事なコミュニケーション手段の一つとして当初は道路標識を中心に作成されたマニュアルを使用していた。しかし、その後に公園の数も増え、その当時の2.82億人の利用者数も4.3億人を超えるものとなり、さらに数だけではなく、多様な人々が公園を利用するようになってきたために、新たな環境変化に対応する必要性が生じてきた。そこで、この状況に対応すべきマニュアルの見直し、追加が行われ、今日のNational Parks UniGuideが出来上がったのである⁽²⁾。現在これを取り仕切るのがバージニア州にあるHarpers Ferry Center(ハーパーズ・フェリーセンター)であるが、このUniGuideには以下のミッションが記されている⁽³⁾。

“The Elements of wayfinding are a series of visual, editorial, and environmental cues to help visitors navigate and experience a National Park without confusion and conflict; the cues must enhance their enjoyment and understanding of the park without damaging the park’s rich natural and cultural resources”

(標識の要素は数々の視覚、解説、環境の糸口であり、利用者を迷うことなく国立公園へと誘導し体験させるのに役立つものである。これらの手がかりは公園の豊かな天然、文化資源を損なうことなく利用者を楽しませ理解させるものでなければならない。)

また、このUniGuideは標識の分類をIdentification(記名標識)、Motorist Guidance(道路標識)、Visitor Information system(利用者標識)の3つに大きく分け、特に最後の利用者標識が公園情報の7割を占めていると述べている。また、この3つの分類をさらに以下のように細かく分類している⁽⁴⁾。

1. Identification(記名)

- Park Identification(公園記名)
- Facility Identification(施設記名)

2. Motorist Guidance(道路誘導)

- Road Guide Signs within parks(公園内の道路案内)
- Highway Guide Signs leading to parks(公園への高速道路案内)
- Trailblazers(道案内)
- Boundary signs(境界線)
- Traffic Regulatory and Warning Signs(交通規制及び注意標識)

3. Visitor Information System(利用者情報)

- ① VIS Facility Identification(施設記名)
 - VIS Park Identification(公園記名)
 - VIS Facility/Park Identification(施設/公園記名)
- ② Vehicular Entry and Guide(車両入口・案内)
 - Area Entry(地域入口)
 - Small Guide(小案内)
 - Traffic Regulatory(交通規制)
- ③ Secondary Identification(第二次記名)
 - Area Identification(地名)
 - Campsite Identification(キャンプ場)
 - Parking Lot Identification(駐車場)
 - Shuttle Stop Identification(シャトル停留所)
- ④ Fee Displays(料金表)
 - Entrance Fees(入園料)
 - Recreation Fees(レクリエーション利用料)
- ⑤ Pedestrian Guidance(遊歩道案内)
 - Trail Guide(トレイルガイド)
 - Fingerboard(指板)
 - Street Name(通り名)
- ⑥ Specific Visitor Information(特別情報)
 - Information/Instruction(情報案内/解説)
 - Resource Management(資源管理)
 - Messaging(メッセージ)
 - Regulations(規制)
 - Protection(保護)
 - Safety Warning Danger(安全注意)
 - Symbol Based Regulation(シンボルに基づく規制)
 - Miscellaneous Postings(その他)
 - Maps(地図)

また、これらの標識を設置する際に考慮する基本的な考え方として次のように記している。

1. 国立公園局のアイデンティティとその公園の特色を生かす。
2. 道路誘導標識においてはその場所の車のスピードや交差点での複雑性や視点などについて配慮をする。また、利用者の視点を考慮した位置、利用者の数や高さに応じた標識の大きさ等を考慮する。
3. できるだけ標識の設置はすくなくする。
4. 乱立した標識設置の仕方は避ける。
5. 秩序だった設置の仕方を心がける。

また、North Country National Scenic Trail(N.C.T.)と称されるアメリカの長距離遊歩道は、ニューヨーク、ペンシルベニア、オハイオ、ミシガン、ウィスコンシン、ミネソタ、ノースダコタの7つの州にまたがる全長7,400kmのアメリカでもっとも長い長距離遊

歩道である。したがって、この長距離遊歩道はアメリカ国立公園局の他に、州政府、地方自治体、そして North Country Trail Association (NCTA) などの多くのボランティア団体が協力し合ってその維持管理をしているのだが、このように複数の組織が関与する場合の知恵として以下に示す分類方法でマニュアルを作成して統一した標識デザインを採用している⁽⁵⁾。こういった複数の団体が関与する場合の統一した公園標識のマニュアル作成は日本の地域制の国立公園においても学ぶべきものがあると思われる。

• North Country Trailの標識分類

1. Highway information Signs (高速道路標識)
2. Warning (Pedestrian Crossing) Signs (注意標識)
3. Entrance Sign (入口標識)
4. Trailhead Information Sign/Kiosk (トレイル入口標識)
5. Regulatory (usage control) Signs (利用規制標識)
6. Road Crossing Signs (道路標識)
7. Reassurance Markers/Blazes (確認標識)
8. Directional Change Indicators (方向標識)
9. Confirmation/Identifications Signs (official trail emblems/logos) (ロゴサイン)
10. Interpretation Signs (解説標識)
 - (1) Identification Signs (記名標識)
 - (2) Interpretive Signs (解説標識)
 - (3) Wayside Exhibits (路傍標識)
11. "Crossing Private Land" Signs (私有地横断標識)
12. You-Are-Here Signs (現在地標識)
13. Destination Signs (目的地標識)
14. Boundary Marker Signs (境界標識)
15. Adopter Signs (関係団体標識)
16. Connector Signs (道路接続標識)

II 標識文言の書き方について

1. アメリカ

一般に標識文言には簡潔さが求められる。利用者が公園を訪れた時に必要最小限度の情報を提供することで、利用者は標識の前で長く立ち止まることなく公園を進むことができるのである。また、限られた標識のスペースの中にすべての情報を盛り込むことには無理があり、できるだけ必要な情報のみを入れることが大切である。

アメリカの公園では、情報や解説などの路傍標識に「3-30-3 ルール」という考え方を当てはめている。それは、利用者によっては、標識の前で3秒しか立ち止まら

ない人もいれば、30秒立ち止まる人もおり、中には3分間もの間、ゆっくりと立ち止まって標識の内容をていねいに読む利用者もいるということだ。したがって、一般的な書き方としては、タイトル、出だしの文言、そしてメインの内容を主体に、イラスト、写真、キャプション等がそれに続くというパターンである。また、通常の標識パネルでは一つのパネルにいくつもの内容を盛り込むのではなく、一つの事柄について解説するのが読み手にとって分かりやすいとされている⁽⁶⁾。

アメリカのUniGuideでは、標識文言の書き方として以下の事柄を配慮している。

- (1) 利用者の注意をすぐに引くような魅力的なタイトルを考えると同時に、明瞭でわかりやすく、標識によっては強烈なグラフィック要素でインパクトを演出することである。
- (2) 出だしの部分はイタリックでタイトルの後に書く。その際に大切なことは1行か2行のコンパクトな文でおさめ、長くとも3行以内にしておく。また、出だしの部分は常にポジティブなトーンで書き出し、なぜここではこのようなルールが必要なのか、或いは復元が必要なのか等、利用者に疑問をぶつけるような書き方をすることで注意を引くことである。あるいは、利用者の好奇心をかきたてるような質問の仕方でも書き出す工夫も大切である。
- (3) パネルの三分の二の範囲でメインの文言をいれるようにするが、できるだけ簡潔にかつ明瞭な表現をつかう。
 - ① “to be”の表現をさける。例えば、“Swimming is not allowed”の代わりに“Swimming not allowed”とか、“No swimming”、“Campfires are permitted”の代わりに“Campfires permitted”といった表現の仕方を書く。
 - ② 通常冠詞は省く(a, an, the)。また、できるだけあいまいな形容詞や副詞の使用も避ける。また、“and”という表現がでてきたところでは、できるだけコンマやセミコロンを使用する。
 - ③ いろいろな情報をリストして書くときには、その最後はピリオドを使用しない。
 - ④ “don’t, doesn’t, aren’t”といった短縮形の言葉遣いを避ける。特に英語が母国語ではない利用者が混乱をしないように配慮すべきである。
 - ⑤ 省略形、頭字語、専門語や役所言葉といった分かりにくい言葉はできるだけさける。
 - ⑥ 主文においては、しっかりと伝えたい内容はきちんとした解説を加え、句読点をいれて完全な文章を作成する。

- ⑦文章ができあがったら、グラフィックデザイナーやイラストレーター等と話し合いながら最終的な標識のレイアウトをデザインする。

さらに路傍標識の注意すべき点として

- (1) 大まかなタイトルの書き方は避けること。例えば、“Geology”(地理)、“Plants”(植物)といった書き方ではなく、解説をしたいという内容のキーワードを示すことで利用者の関心を引き付けることができる。
- (2) 矛盾、ミステリー、驚きといった予期しない言葉は利用者を引き付ける要素である。また、あまりに詳しい事実や難しい科学的な知識を書きならべても利用者は立ち去ってしまうので、むしろ、簡潔に俳句の要領で書くことが大切である。
- (3) 誰でもが理解できる言葉を使い、専門用語や難しい用語は避ける。特に“natural and cultural resources”といった専門用語ではなく、一般の人が普段利用するわかりやすい言葉を使う。また、“park”という言葉をも多用しない。
- (4) わかりきった言葉を繰り返し使用しない。
路傍標識はパークレンジャーではないので、わざわざ解説標識の中に“Welcome to Big Beautiful National Park.”というような表現は入れる必要はない。
- (5) 旅行のガイドブックや航空会社のポスターのようにその場所へ誘導するようなコマース的な場所の説明は無用である。むしろ、この場所の素晴らしさや価値についてしっかりと伝えるべきである。
- (6) 情報と解説は異なるものであることを理解すべきである。きちんとその場所について利用者がその場所の価値を理解できるような内容を展示すべきである。

2. カナダ

カナダのパークスカナダも標識デザインに関するマニュアルがつくられているが、この中で大事なメッセージの伝え方として次の事項を掲げている⁽⁷⁾。

- (1) 簡潔さ
- (2) 明瞭さ
- (3) 言葉のわかりやすさ
- (4) 内容が同じとなるような多言語での表現
- (5) 文脈のわかりやすさ
- (6) 論理性—文章の流れ
- (7) 最初のメッセージと2番目のメッセージの差の違い
- (8) 一貫性
- (9) 環境に対する標識の視覚インパクトの配慮

3. オーストラリア

オーストラリアでは効果的な標識について次のような注意を促している⁽⁸⁾。

- (1) わかりやすい場所に設置すること
- (2) 理解しやすい文言を使用すること
- (3) 背景の色に負けて見にくくならないような色を選択する
- (4) 多言語表記を心得る
- (5) グラフィックスやノーサインのシンボルマーク等も効果的に利用する
- (6) 一つの標識に多くのメッセージを詰め込むことは避ける。

また、注意、危険サインについて、主として若者や外国人利用者のリスクが高いことから、標識に“Males aged 18-30!”といった文言を入れ込むことで、リスクの高い若者たちに特別に注意を促す方法もあるという。こういったアメリカ、カナダ、オーストラリアのどの国についても共通してあげられる公園標識の大切な要素は、「簡潔さ」と「明瞭性」と「わかりやすさ」の3つであろう。

Ⅲ 海外の英語文言標識の事例について

日本の禁止、注意・警告についての公園標識について日ごろから気になっていたことがある。それは「するな」「やるな」「あたえるな」といった強い禁止や命令口調のメッセージが外国の標識に比較して多いのではということである。こういった標識は、国立公園内の事故防止や自然保護の為の大切な情報ではあるが、あまりに「No～」という否定的な文言が目飛び込むと、公園を楽しんでいるというポジティブな気持ちさがれ、多少は反発を覚える場合もある。そこで、海外では、ユーモアというスパイスを効かすことで、その場を和ませ、それでいて効果的なメッセージの印象を残すことに努力をしているのである。海外の公園標識を見ていると、こういったユーモアのある標識を見かけることも多く、ここではそのいくつかについて紹介するとともに、その他の点についても参考となる事例を挙げてみる。

1. ユーモアのセンス

読んでいて思わずクスッと笑ってしまう文言は、人の目を引き付け、さほどメッセージに気に留めない利用者にも浸透させることができる。

まずユーモアについてであるが、ユーモアとは、三省堂国語辞典では「人間味のある上品なおかしみ」と

定義しており、ユーモアはある種の気配りを持ったコミュニケーションの手段でもあり、そこには『思いやり』の心が存在する。また、ユーモアが何故あるのかについて、様々な学説で説明がなされてきたが、MITの研究者はユーモアについて5つの理論を展開している⁽⁹⁾。

- ①生物学的理論：ユーモアと笑いは生得的だという観察
- ②遊戯理論：遊んでいる子供の笑いのように、人間の笑いのルーツとするもので、遊戯やくすぐりで攻撃、敵意の緩和を促す用途から進化したものとする理論
- ③優位理論：他の人より優位に立った感覚又はそういう認識から生じるもの
- ④解放理論：高まりすぎた神経の興奮を開放する形式
- ⑤不一致と不一致解決理論：不一致が生じて、それが解決された時にユーモアが生じる。
- ⑥驚き理論：緊張の解放が「突然に意外な形で」やってきて緊張が解放された時に生じるユーモア
- ⑦機械的ユーモア理論：ユーモアを硬直性への解決策ととらえ、「笑い」を社会的な調整薬とみるもの。

これらのいずれの場合にもその根本にあるものは笑わせる要素を持っていることである。また「思いやり」を含んだ思想でもある。無意識にやってしまいそうなマナーやミスをしてしまいそうな行為等、人が気づかなかったことをユーモアで指摘したりされることで間違いを犯す恥ずかしさから逃れられ、むしろ面白いところを突かれたという「参ったナ～」意識を素直に出すこともできる。ユーモアと語彙の種類はたくさんあり、その中にはマイナスの笑いもあるが、公園標識においては、むしろ相手への気配りや思いやりの心からのコミュニケーション手段として利用するのがよいのではないだろうか。

また、ユーモアの表現方法としてはドタバタ喜劇、皮肉や風刺からダブルミーニングや韻を踏む言葉遊びやジョーク等があるが、こういった中で、海外の公園標識のユーモアセンスに良くみられるのはダブルミーニングや類似の韻を持った言葉を使用して、響きの心地よさを演出している。例えば、“After Whisky, Driving Risky!”等がそうである。また、公園標識の文言で気をつけなければいけないのは「品格」である。すなわちユーモアとジョークとは異なり、公園標識のユーモアには知的センスが求められるということである。単に面白い、おかしいだけではなく、その中に大切な伝えるべきメッセージがきちんと含まれていなければならない。そういう意味で使い方には細心の

注意を払う必要がある。

(写真1)はリスが木の実を食べる写真に「Parking for longer than 3 hours is nuts!」と書かれているが、これはダブルミーニングを使っている。日本語に訳すと「3時間以上駐車をするとあなたはナッツだ」となるが、ここではリスの食べる木の実のナッツと英語で時々用いられる「馬鹿な奴、ダメなやつ」という意味と両方かけている。(写真2)の絵はPuffinというツノメドリで、また、英語でPuffingという言葉は「煙草をプカプカする」という意味がある。そこで、PuffinがPuffingしている絵を使い、「禁煙」を表示している。(写真3)の“Stop Monkeying Around”は、「時間をだらだら無駄にする」という意味があり、このメッセージは、「時間を無駄にしないで、すぐ今日電話を!」という標語であるが、この標識はホノルル動物園内にあり、明らかにMonkey(サル)という動物の名前を使って効果をだしている。(写真4)は“Goats Have No Manners”と書かれているが、これは「ヤギのマナーは悪いですよ」と書くことで、逆に利用者に適切なマナーを促しているという標識である。こういった比喩的な表現方法は人の笑いと注意を引く文言である。(写真5)はBeware Humans!と書かれており、横に自動車を置いているが、これは動物に「人間に気をつける!」という警告をしているサインではあるが、そこには人間の横暴さを警告する人間自身への戒めのようなメッセージもこめられている。ホノルル動物園にはかつて、最も獐猛な動物と書かれた檻を除くと自分の顔が鏡に映るようになっていた。これは人間が最も獐猛であるという皮肉を込めたサインであろう。

2. 肯定的表現方法

日本に限らず、公園の注意、警告を促す標識でよくみられるデザインはピクトグラムにその行為の絵が描かれ、それに禁止を示す斜め線が引かれているパターンである。また、言葉の前に“No～”という言葉が付いたパターンである。“No smoking”とか“No parking”等の簡潔な表現方法ですぐに禁止事項とわかる標識である。しかし、心理学の分野においては、禁止される程、やってみたくなるカリギュラ効果という心理現象があるという。そしてその効果について、実際にアメリカの国立公園で実験を行った研究があり、その結果によると、ネガティブな表現は効果的ではなく、むしろ肯定文での指示、指導の方が効果的であることが示された⁽¹⁰⁾。確かに「やるな、入るな、ふれるな」といったネガティブな言葉で表現された標識を見て心地よさを覚える人はいない。ましてや強い禁止事項の文言を見れば見るほど、人は逆に反発さえ覚えるもので

ある。より国立公園を楽しむためには、或いは文言を読んで欲しいのであれば肯定的な文言で注意を促す方が効果的である。

(写真6)は“Help Protect the Vegetation”という表現方法をつかっている。ともすると「植生を傷つけるな」とか「この場所への立ち入り禁止」といった否定的な文言を使いがちになるが、“Help”という言葉で自主的な協力を要請する表現となっている。また、(写真7)は禁止行為をピクトグラムで示した後に、“but lots of fun”という言葉でフォローしている。この言いまわしは利用者の心を和ませるものである。

(写真8)も禁煙を表現するのに、“No Smoking”という言葉は使わずに、“This is A Smoke Free Facility”という肯定的な表現方法で、禁止の“No”という言葉は使用していない。同じく(写真9)も否定的な禁止表現ではなく、“Their Future is in Your Hands”「彼らの未来はあなたの手に委ねられている」という表現方法で協力を要請した文言をつかっている。

3. 簡潔さと明瞭さ

アメリカ、カナダ、オーストラリア等の国立公園が共通してあげている文言表記の大切さとして簡潔さと明瞭さをあげている。アメリカのUniGuideの中でも、わざわざ「俳句のように」という言葉をいれている程、短い言葉で表現する重要性を強調している。また、長い説明が必要な場合にはパンフレットや直接解説員から話を聞くなどの別の手段をつかうべきだとの考え方である。こういった考え方の根底には、国立公園と言う場所は出来るだけ人工物を最小限度にとどめておくということと、訪れる利用者にはあくまでも自然そのものや本物の動植物を観察して欲しいという意図がある。これは日本と米国のビジターセンター発展についてもいえることで、アメリカのビジターセンターがインタープリターの補助手段として存在するのに対し、日本のビジターセンターはインタープリターの不足、又は代用として設けられてきたという経緯があり、ついついこういった人工的な解説に力をいれてしまう。アメリカではビジターが最も時間を費やすべきは自然の中であり、建物の中の展示や解説物に時間をかけすぎるべきではないという発想で、ビジターセンターの建物の規模をできるだけ小さくしたり、或いは数を減らしたり、極端なケースはモービルユニットで代用したりと日本のビジターセンター整備の方針と反対の方向にあるような気がする。したがって、路傍の解説標識等についても長文での説明は避けるべきとの考え方が行き渡っている。特に危険や注意を促す標識は一目で理解できるものがよい。(写真10, 11, 12)のいずれ

も海岸線の滑りやすい岩場のところにつくられた注意標識だが、一つの看板にまとめて注意を収めることによって、いくつもの注意標識の乱立をさけることができる。(写真13)は節水を求める文言だが、わかりやすく、かつインパクトのあるメッセージである。

4. 公園資源の保護を訴える表現方法

動植物の保護を訴える表現として、「動物にエサを与えないで」とか、「植物の枝を折らないで」といった文言を日本ではよく見かけるが、英語標識では“Respect”とか“Help”のような言葉を使い協力を求めている。例えば、(写真14)は、“Quiet Zone: Please Respect Our Primates”という書き方をしており、(写真15)は“Please Respect Your National Monuments”という風に、ここでも“Respect”という言葉を使っている。日本語では“Respect”という意味は尊敬、敬意という意味であり、人が人に対して敬意を払う場合に使う言葉であるが、それを動植物やモニュメントといった大切な公園資源に敬意を表して欲しい場合に使用することで、それらの価値を重んじるニュアンスが感ぜられる。また(写真16, 17)はワシントンDCのポトマック河畔の桜の木であるが、多くの人々が触れたり、湖畔に伸びた枝に座ってよく記念写真を撮っている。特に桜祭りの季節のそれらの木にかかる負荷は大きいものがある。また、これらの多くの桜はすでに老木であり、そういった行為に対して、“Don't touch!”という言い方ではなく、“Please Help ~”とか、“Help Us ~”という言い回しによって自主的な協力を求めるニュアンスで和らげている。特に弱った桜の木の場所では、“Help Us Survive ~”という表現が使われていた。

5. 見出しのインパクト

この手法は最初の一言、或いは一行で人々の関心を引き付ける方法である。

例えば、“Fun Facts!”、“First thing, first”、“Watch out!”、“Did you know?”、“Sad but true…”といった表現で始まる文言である。こういった出だしの表現によって、利用者の好奇心を十分に引き付けることができる。また、疑問形を使用したり、文字による大小や、内容に緩急をつけることで、より見出しの文言が引き立つということもある。例としては、USS Arizona Memorialで最初の行の最初の言葉の“Japan Bold Plan”を大きな太字で表現したり、“Big Animal!”という表現を用いるところで、“Big”という言葉を大きい太字で書くことでより、その大きさのイメージをつかめるという工夫の仕方も見られた。(写真18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29)

6. 寄附の求め方

動植物園や美術館にはよく寄付金の箱が備え付けられていたり、会員になって欲しいという標識やポスターが貼られていたりする。しかし、こういった場合の表現方法にも工夫が凝らされている。例えば、「寄付して下さい」といったストレートな要請ではなく、「You are always welcome whether or not you choose to donate!」「どうぞご自分のご意志でご寄付を」という表現だったり、「Recommended donation \$2.00」「2ドル位の寄付を頂ければ」といった形で協力を求めている。中にはコインをいれるボックスのデザインを子供がゲームを楽しむようなデザインにしたり、お布施やお賽銭をイメージする形の寄付金ボックスを作って、そこに「Make a Wish」（願いをかけて!）という言葉を追加している。(写真30, 31, 32, 33)

また、(写真34)のように「It costs a lot to keep our Free Zoo Free, Will you Help?」といった表現で経済的な支援を訴えたりしている。また、(写真35)のように、寄付金がどのように使用されるかという内容を丁寧に説明することで協力を仰ぐ方法もよくみかける。(写真36, 37)はオーストラリアのカランビンワイルドライフサンクチュアリの標識だが、餌付け皿を購入して鳥にエサをあげることで、その購入金が寄附となるという仕組みや、どの動物保護に寄付金が使われるのかを分かりやすく示すためにカエルのデザインの寄付箱を設置している。このように自分の寄付金の用途が分かりやすくと、人々も寄付しやすくなるものである。

7. 地元の文化を大切に。時として地元に関わる神話、伝説等を用いてビジターに

道徳的なマナーを促す

多くの国立公園は原住民の聖地である場合も多く、そういった場所においてはその歴史・文化的価値を説明することで、利用者に敬意を払ってもらうようにしている。ハワイの火山国立公園は「Sacred site」（聖地）として知られており、そういった標識を見かけることが多いが、ここに「ペレの涙」という標識があり、利用者がこの公園の石を持ち出すことによってこの聖地の女神のペレが泣きますというような表現を見たことがある。現在でも使用されているのかどうかは定かではないが、こういった神話は時として法的規制より効果的であるといわれている。(写真38, 39)はウルル・カタジュタのアボリジニ文化に対し敬意を払うことを求めている標識であり、(写真40)はハワイ火山国立公園の標識であるが、いずれの場合にも「Sacred Site」

という言葉を使って聖地であることを記している。また、(写真41)のアメリカのアーリントン墓地にも「Sacred Shrine」という言葉で、その訪問に対しては特別な敬意を払うことを自主的に促している。日本でも社寺仏閣を外国人利用者が訪れる時に求めるマナーの書き方として、「Sacred Site」という言葉はカギとなるだろう。

8. その他

利用者に理解や協力を求める場合に、堅苦しい書き方より、普段、使用しているカジュアルな言葉を使って注意を促す表現も効果的である。(写真42, 43, 44, 45)は標識のデザインにそのものの形を利用している例で、(写真42)はユーモアを交えながら動物園の檻に入った動物の気持ちを体験させるような工夫がされている。(写真43)は犬、(写真44)は「この道や夜間明かりがつかますよ」というサインであり、(写真45)はディンゴが海を渡ってオーストラリアにたどり着いたという説明をしている動物園内の解説標識である。また、かわったところで、「Don't Waste Australia」という国の名前を使って資源節約を訴えているインパクトのある文言も見受けられる。(写真46) また(写真47, 48)のようにしっかりと法律の名前を入れることで、罰則規定がどの法律に基づくものであるのかを明確にしている。(写真48)はハワイの現在整備が始まったHonouliuli Monumentの農地に建てられていた看板であるが、農作物の盗難に対してははっきりと「It is a Crime ~」という言葉を使用することで、明確にその行為が犯罪であることを示す文言である。日本では違法行為に対する標識が、たんにマナー違反なのか、違法行為、犯罪行為にあたるのか分かりにくい場合が多いが、海外ではどの法律に違反するものかとか、また、罰金の額をはっきり示すことで強い注意を促している。

(写真49, 50)は鳥を見た場合に記録をして欲しいという標識であるが、これらはデータを取ると同時に、利用者にバードウォッチングの更なる関心をもたせる効果があると思われる。(写真51)は公園ボランティアに対する感謝の言葉が入っている標識である。日本では多くのボランティアグループが公園の管理を支えているにもかかわらず、標識を作成した団体やその管理団体名だけで、こういった形のメッセージがはいっている標識はまだ少ない。このような文言が標識のほんの一行にでも含まれると、感謝の気持ちで公園を利用することができるだろう。(写真52)はアメリカ自然保護の父といわれるジョン・ミューアのメッセージである。この標識がある場所がジョン・ミューアの森であるということもあろうが、時としてこのような

メッセージは森を歩くときにさらなる哲学思考を促す要素ともなる。(写真53)はUnisexを示すものであるが、日本では「男女兼用」や「多目的利用」といった文言で使用されているものであるが、今後、日本でも英語表記をする場合の注意を要する文言の一つであろう。

おわりに

主として今回調査を行ったアメリカ、カナダ、オーストラリアの国立公園は基本的には建造物の公園であるため、公園内の標識デザインには統一性があり、公園毎にその公園管理をする政府のロゴも使用されており非常にわかりやすい。また、それぞれが詳細な標識デザインのマニュアルを持っており、それを指針として、各公園がさらに具体的な標識のデザインや文言を作成している。しかし、文言の作成に関しては、かなりの工夫をしている印象を受ける。また、文言にユーモアや機知をいれるには、通常の文言にさらにひねった工夫が求められるが、それだけ公園標識の文言の内容を重視していることでもある。

外山滋比古はユーモアを使う場合は「同時にユーモアを感じ取る側にも洗練された言葉の感覚が必要である。」ことを強調しているが、受け手にそのユーモアが理解されなければ意味をなさない⁽¹¹⁾。関西に笑いの文化があるのは、昔から商売を円滑に進めるために、ユーモアをまぶして角をたてないようなコミュニケーションの手段が発達していたと述べる心理学者もいるが、まさに、ユーモアの笑いで場を和ませる文化は日本にも昔からあるといわれている⁽¹²⁾。さらに、ユーモアは「喜びとショックの混合物」とも言われ、突然、意外な形でやってきて、緊張が突如解放されるのである⁽¹³⁾。したがって、公園標識の禁止、注意・警告といった精神の緊張が求められる標識等に使用される時にはクッションのような役目を果たし、効果を発揮するのである。

わが国では地域制の公園ということで、時として標識のデザインや色、形がバラバラで同じ場所に複数の標識が乱立しているケースも見られるが、こういった問題については、North Country Trailのように共同のAssociationを設立して統一したデザインを作成する協力体制をつくってもよいのではないだろうか。また、今後需要が見込まれる多言語標識における外国語の文言についても、日本語をストレートに訳するのではなく、海外の標識に見るユーモアのセンスも取り入れ、海外の文化の違い等も考慮しながら利用者を不快にさせない表現方法を工夫しながら作っていくことが望まれる。

改めて思うことは、これらの国の標識の基本は出来るだけ、人工物は目立たず少なくという基本である。わが国ではすべての公園がそうだとは言わないまでも、「隠す」工夫というより、「見せる」工夫をこらした形の標識が公園によっては目立っている気がする。それは特に国立公園というより観光地として発展してきた公園にいえることかもしれないが、こういったことに対する発想の転換について、今後考えていくべき課題なのではという気がする。風景の中で人工物が目立ちすぎることには注意を払う必要がある。そしてなにより利用者の安全性や公園の資源の保護という観点から読んで欲しい標識については、利用者が足を止め、最後まで読んでくれる文言を作成する工夫が求められ、それらについてはまだまだ海外から学ぶべきものがあると思われる。

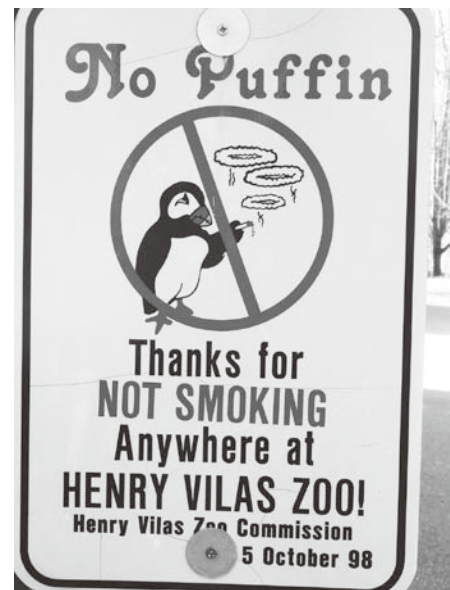
引用文献

- (1) 親泊素子(2010)「アメリカの国立公園における標識デザインのルーツを探る～世界の国立公園のデザインポリシーに与えた影響～」『環境国際協力』Vol.5, p.14.
- (2) US National Park Service, History of National Park Service Visual Identity.
<https://www.nps.gov/hfc/services/identity/identity-history.cfm>, (参照2018-03-01)
- (3) National Park Service, U.S. Dept. of the Interior, UniGuide (2003)
NPS UniGuide Standards-Rackcdn.com
<http://cd3abd6beebe142023d-31d81c9257c913252cbd.sst.ct2.rackcdn.> (参照2018-03-01)
- (4) Ibid., pp.3-2-1-3-2-24.
- (5) Chapter 7-National Park Service
https://www.nps.gov/noco/learn/management/upload/NCT_CH7.REV.pdf.
(参照2018-03-15)
- (6) National Park Service, U.S. Dept. of the Interior, UniGuide, pp.3-6-3-3-6-15.
- (7) Parks Canada, Parks (2007) Canada Identity Program Exterior Signage Standards and Guidelines Version 1
[on line] publications.gc.ca/pub?id=391635&sl=0
- (8) Good signage in national parks can save lives. Here's how to do it right.
[online] Theconservation.com/good-signage-in-national-parks-can-save-lives-heres-how-to-do- (参照2018-03-15)

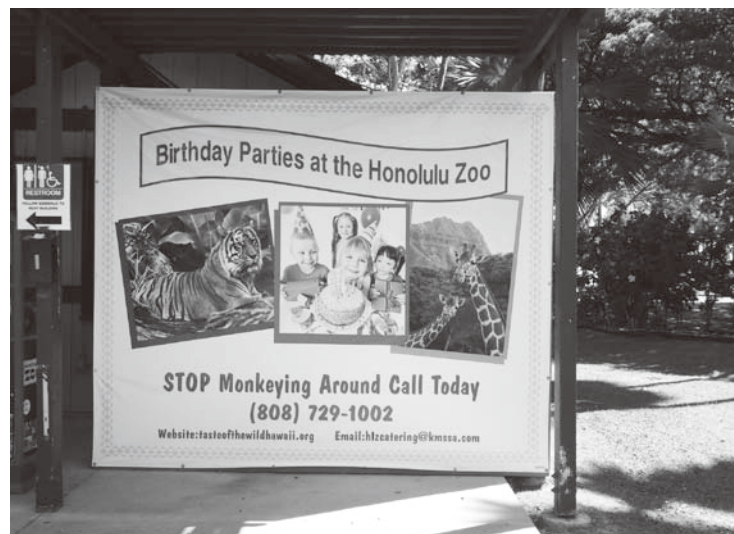
- (9) Hurley, M.M, Dennett, D.C., & Adams, R.B. (2011) Inside jokes: Using Humor to Reverse-Engineer the Mind. MIT Press.(片岡宏仁(訳) (2015). ヒトはなぜ笑うか—ユーモアが存在する理由—、勁草書房)pp.73-103.
- (10) Winter, P.L.(2008) Park signs and visitor behavior: A research summary, <https://www.nature.nps.gov/ParkScience/index.cfm?ArticleID=248&Page=1>(参照 2018-03-15)
- (11) 外山滋比古(2003)「ユーモアのレッスン」中央公論新社、p.24.
- (12) 浦 光博(2016)「笑いの心理学—関西人はなぜ笑うか—」
www.i-repository.net/contents/outemon/ir/602/602170303.pdf(参照 2018-03-20)
- (13) Hurley, M.M, Dennett, D.C., & Adams, R.B. op. cit., p.99.



1. Henry Vilas Zoo, Madison, WI, USA



2. 同左



3. Honolulu Zoo, Honolulu, HI, USA



4. Henry Vilas Zoo



5. Currumbin Wildlife Sanctuary, Currumbin, QLD, Australia



6. Uluru-Kata Tjuta National Park, Uluru, NT, Australia



7. Marshmallow Park, Adelaide, SA, Australia



8. USS Arizona Memorial (World War II Valor in the Pacific National Monument), Honolulu, HI, USA



9. Currumbin Wildlife Sanctuary



10. Flinders Chase National Park, Kangaroo Island, Australia



11. Flinders Chase National Park,
Kangaroo Island, Australia



12. Hawaii Volcanoes National Park, HI, USA



13. Lamington National Park, QLD, Australia



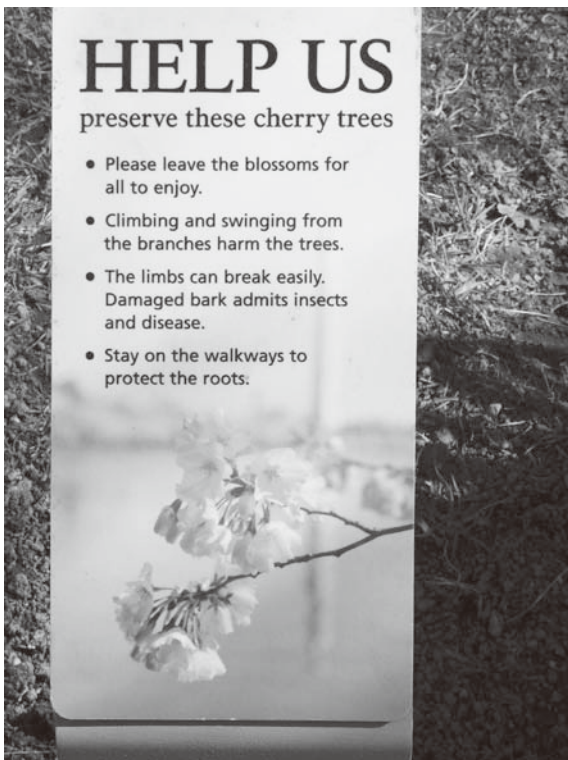
14. Henry Vilas Zoo



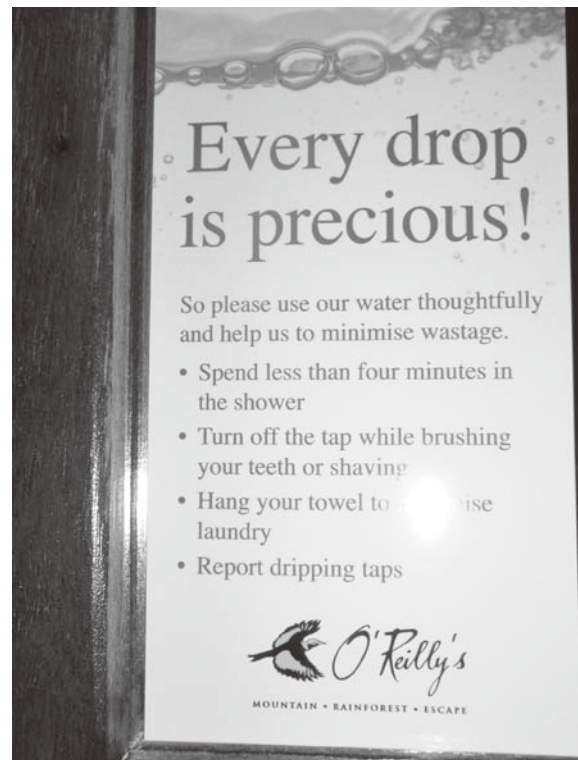
15. National Mall, Washington, DC, USA



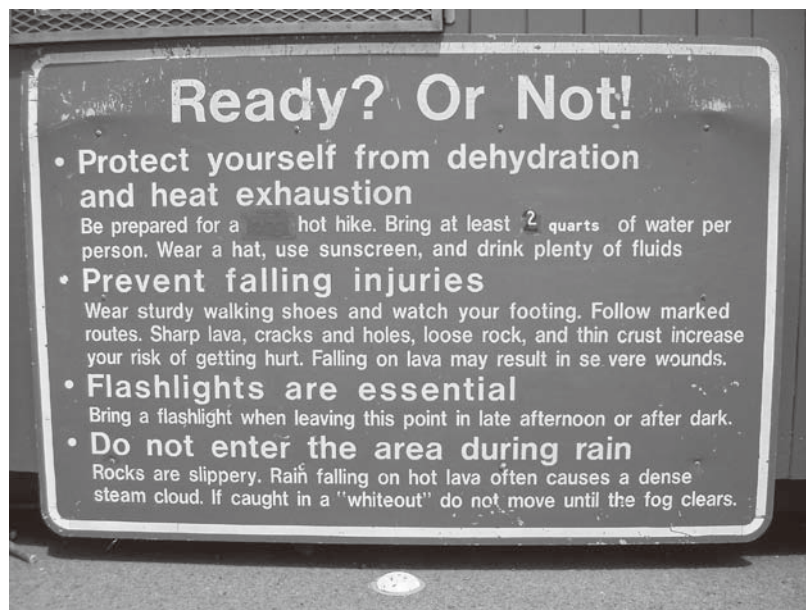
16. 同上



17. National Mall, Washington, DC, USA



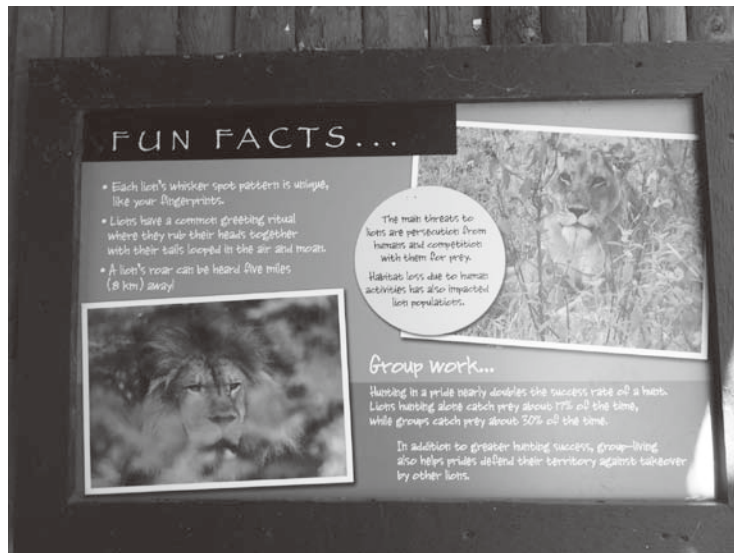
18. O'Reilly's Guest House, Lamington National Park, QLD, Australia



19. Hawaii Volcanoes National Park



20. Flinders Chase National Park



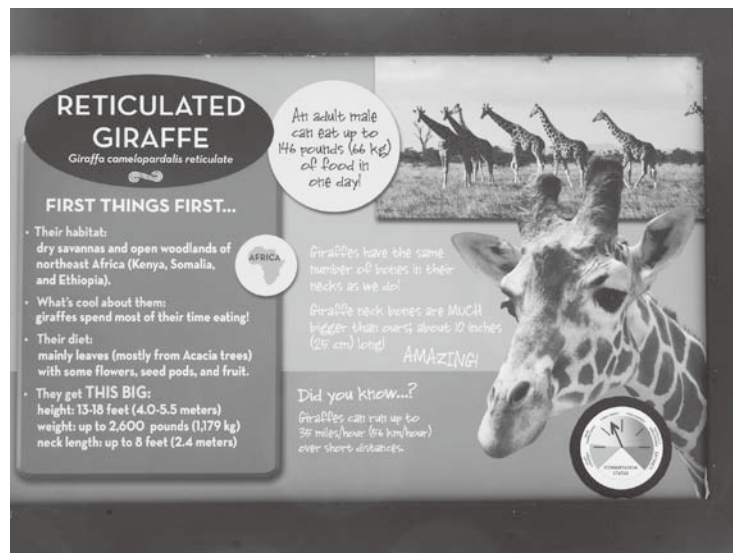
21. Henry Vilas Zoo



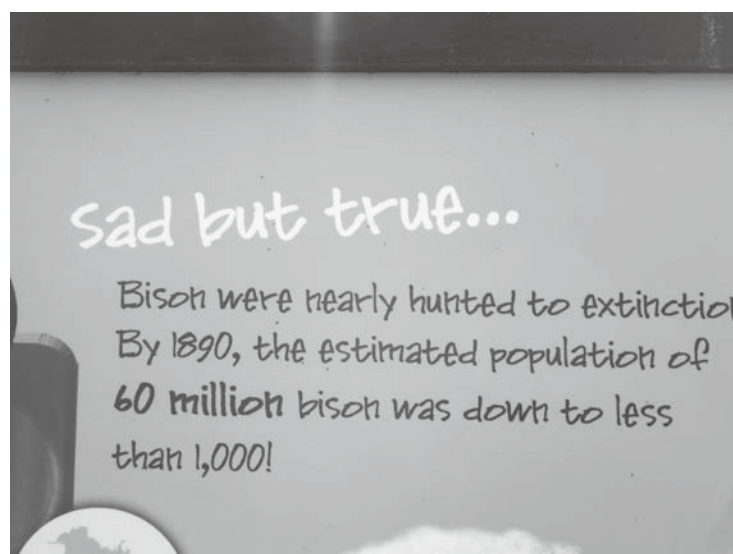
22. 同上



23. Henry Vilas Zoo



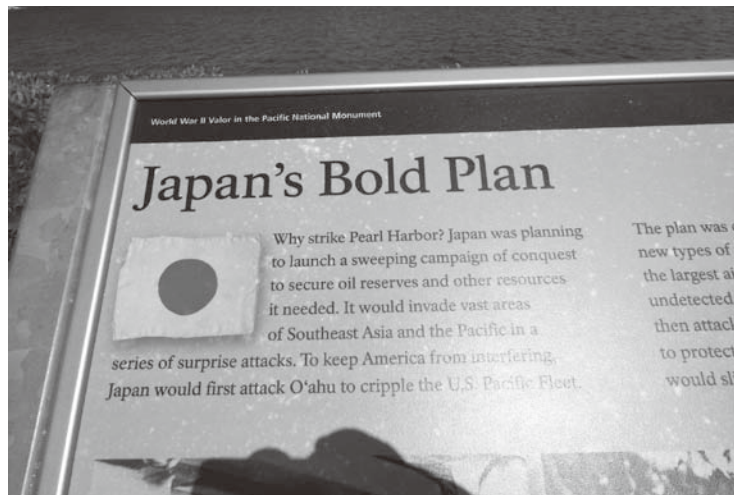
24. 同上



25. 同上



26. Lakeshore Nature Preserve, Madison, WI, USA



27. USS Arizona Memorial



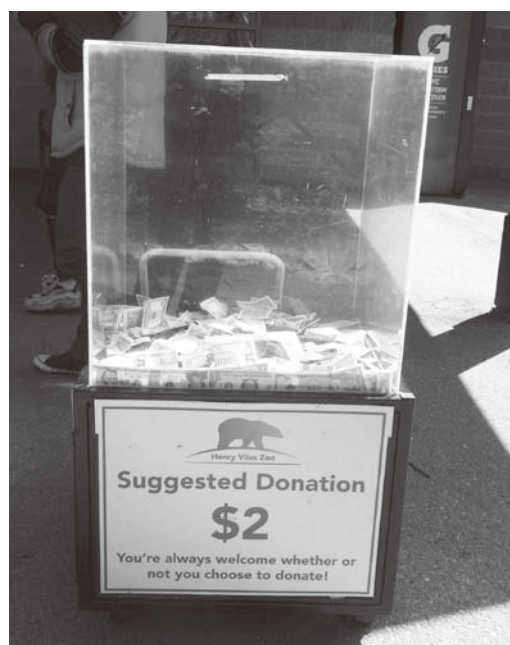
28. Currumbin Wildlife Sanctuary



29. Lamington National Park



30. Henry Vilas Zoo



31. 同上



32. Honolulu Zoo



33. 同上



34. Henry Vilas Zoo



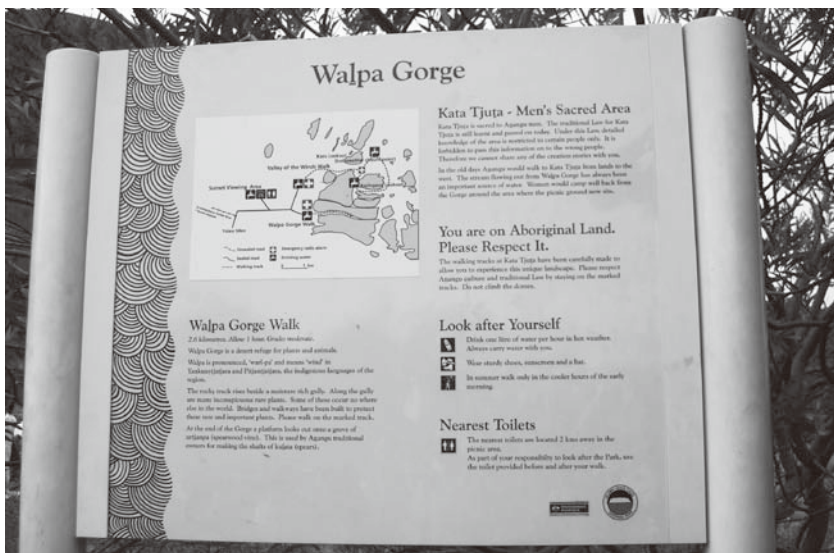
35. Allen Centennial Gardens, University of Wisconsin, Madison, WI, USA



36. Currumbin Wildlife Sanctuary



37. 同上



38. Ululu-Kata Tjuta National Park



39. Ululu-Kata Tjuta National Park



40. Hawaii Volcanoes National Park



41. Arlington National Cemetery, Arlington, VA, USA



42. Henry Vilas Zoo



43. Marshmallow Park



44. University of Wisconsin, Madison, WI, USA



45. Healesville Sanctuary, Melbourne, VC, Australia



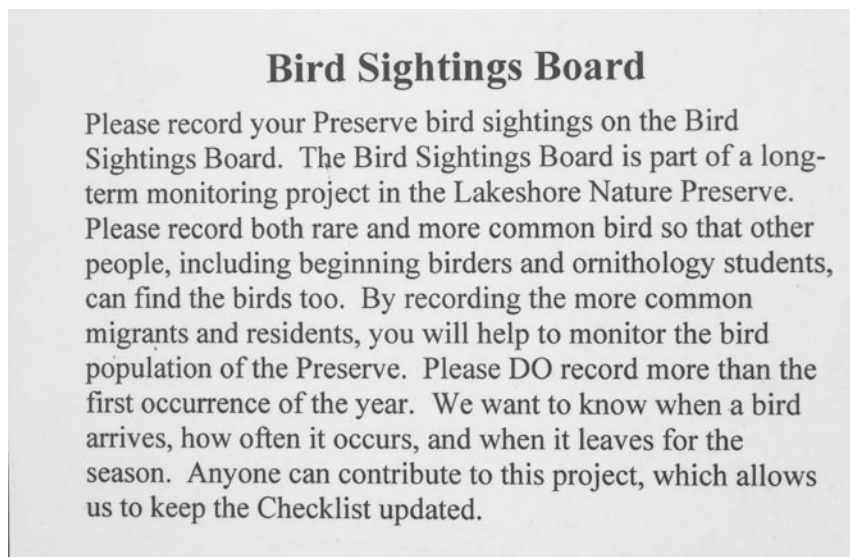
46. Currumbin Wildlife Sanctuary



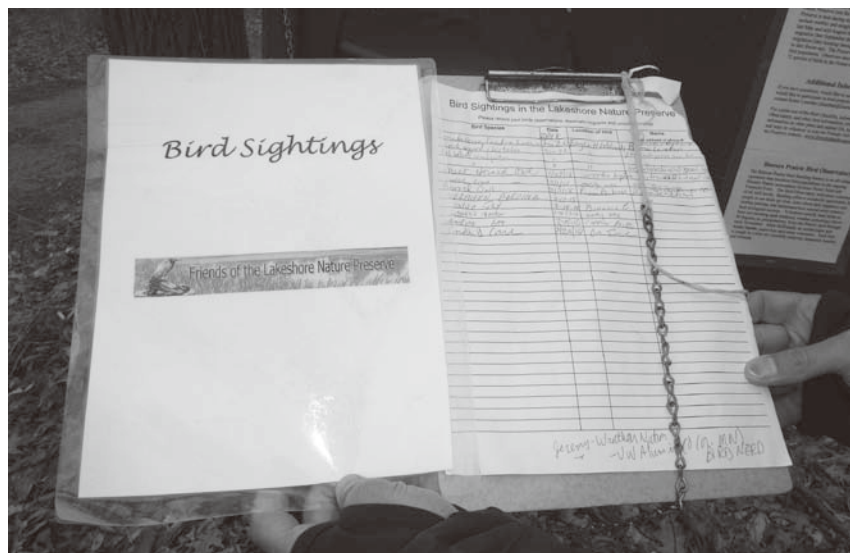
47. Springbrook National Park, Springbrook. QLD, Australia



48. Honouliuli Internment Camp proposed site, Honolulu, HI, USA



49. Lakeshore Nature Preserve



50. 同上



51. John Muir Woods, Madison, WI, USA



52. John Muir Woods, Madison, WI, USA



53. Tamborine National Park, QLD, Australia